

## 北村西望の上中里・西ヶ原時代

野 城 今日子

北村西望（明治一七年～昭和六二年 以下、西望と称す）は、昭和三〇年完成の《平和祈念像》の作者として知られるとともに、戦前から戦後の彫刻界をけん引した彫刻家である。

著者は、二〇一八年頃から西望に関する一次資料（個人蔵）の継続的な資料整理・調査を行ってきた。その一部は、拙論「曠原社の活動と理念について―新出資料を中心に―」<sup>〔註一〕</sup>ですでに紹介をしているが、本稿では、新たに発見された資料を紹介しながら、井の頭自然動物園で制作した《平和祈念像》前史、すなわち郷里の長崎から京都、東京の上中里・西ヶ原時代の西望の活動をまとめたい。

### 紹介する資料について

本稿では、資料の中でも主に「証書」、「アルバム写真」の内容を中心に紹介していく（一部は別の資料も含む）。

「証書」は明治二九年に白木野尋常小学校を卒業時からのものから、晩年までに受賞・受章した際の賞状が数多く現存している。これまで、この証書が存在することはわかっておらず、今回、はじめて紹介する資料となる。

「アルバム写真」は、西望が製作したと考えられるスクラップブックであり、明治三六年、京都に上京した頃から昭和三〇年代頃の西ヶ原を拠点として活動していた時代の写真などが収録されている。現状は遺族が所蔵している。このアルバムの内容は、これまで出典が明らかとなっていなかった『百歳のかたつむり』（日本経済新聞社昭和五八年）や『北村西望 百歳の譜』（新三多摩新聞社 昭和五七年）に挿図として使用されていた写真類を収めたものであった。おそらく、これらの書籍が刊行されるまでは西望のかたわらにあったと思われるが、死後に行方がわからなくなっていたものとみられる。また、同アルバムの写真の多くが時系列に並んで貼り付けられているため、書籍の編集の際に改めて編集された可能性もあるだろう。いずれにしろ、西望の人生を語るに特に重要な資料といえる。

本稿では、長らく写真自体を改めて紹介しながら、これまで紹介されていなかった周囲に書かれている西望による直筆のメモや、新出の写真なども扱っていく。

## 長崎時代

明治一七（一八八四）年、北村西望は長崎県南高来郡南有馬村白木野（しらかの みまのむら）名字宮ノ木場（なごみやの きば）に生まれる。本名は西望（にしむ）。父は陳連（のぶづ）、母親はサイといい、五〇町歩（四九五、八六七・五㎡）ほどの土地持ちであったという。

また、陳連は熱心な本願寺派浄土真宗の在家信者であった。西望という名も「浄土真宗の教義が説く西方の極楽浄土を望む」という意味でと名付けられた。<sup>〔註二〕</sup>

明治二九年に白木野尋常小学校を卒業し（証書一）、有馬高等小学校に入学。同校を明治三十三年に卒業し（証書二）、翌年の明治三四年、白木野尋常小学校の代用教員となった（証書三）。

その後、明治三五年に長崎師範学校に入学をするが、体を壊し、退学。実家での療養中に彫刻を初めてつくり、彫刻制作の魅力を知ったという。

## 京都時代

明治三六年、一八歳で京都市立美術工芸学校彫刻科へ入学した。下宿先は聖護院の近くであったという。そこでは彫刻家の国安虎三郎に師事し、木彫・塑造を学んだ。

西望は、作品写真などその冒頭には、「京都市立美術工芸学校入学当時」（右）、「京都美術一年ノ秋」（中央）、「昭和三十八年ノ四月」（左）という三枚の写真が貼り付けられていた（写真一）。いずれも京都市立美術工芸学校時代に撮影された西望の姿である。

そのうち、中央の「京都美術一年ノ秋」という写真では、西望がレリーフとともに写されており、写真のかたわらには「木彫 明治三十六年十一月」というメモが残されている。のちに西望は「木の板を各自配られて、そ

こに直線や曲線を筋彫りする。退屈なことだが、これを一カ月ぐらいやらされた。次に、丸彫りに進んで、板に凹凸のある浮き彫りを練習する」<sup>（註三）</sup>と語っており、このレリーフは浮き彫りの課題で制作したものかもしれない。

二年生では成績良好のため、雑誌『自然』を一冊給与されたほか（証書四）、四年生でも成績優秀として表彰された（証書五）。また、明治四〇年の卒業の際には一等賞を受賞している（証書六）。この京都時代には、のちの盟友・建島大夢とも出会った。「昭和三十八年ノ四月」の写真では、「建島大夢 西望」というメモも書かれていることから、建島とともに撮られた写真であることがわかる。

## 東京へ ―西ヶ原、千駄木、渋谷まで

明治四〇年、先に上京した建島を追って東京美術学校に入学する。上京した西望は、当初、滝野川西ヶ原で下宿をはじめた。当初、西洋画科に進学を希望していたが、受験に失敗し、彫刻科・塑造部に入学した。

塑造部では、白井雨山に師事。入学後には、本郷千駄木にあった雨山邸の自宅に移り住んだ。

この間に、国営サロンである官展への出品にチャレンジしている。第一回文展には落選をするが、第二回文展に《墳闘》（写真二）、三回に《雄風》（写真三）、四回に《壮者》（写真四）（いずれも現存せず）を出品し、入選している。《墳闘》の写真には、「文展二回 明治四一年」、《雄風》の写真には「明治四二年 文展第三回」、《壮者》の写真には「明治四三年 文展第四回」という書きつけがある。これらの作品は、管見の限り本写真でしか存在を確認することができないため、貴重な写真であることがいえる。また、《墳闘》と《壮者》は褒状も受け

た。いずれも男性の肉体を表しており、この頃から男性像を得意としていたことがわかる。

明治四五年には東京美術学校を卒業。アルバムとは別に存在する写真資料「東京美術学校第二回卒業式」(写真五)と題する卒業写真をみると、教授には白井雨山(保次郎)のほか、高村光雲、竹内久一、沼田一雅(勇次郎)、海野美盛がいることが確認できる。また、彫刻科の同級生には矢野誠一、吉田三郎がいた。他の学科では、今和次郎などの名前も確認できる。

卒業後、大正元年には、沼田一雅とともに東京神田の今川橋松屋呉服店の建築装飾の原型を手掛けている。(註四)こうした造形関係の仕事の傍ら、彫刻制作に励んだ。大正三年には、同郷の板倉春野と結婚し、沼田一雅が住んでいた渋谷に移住した。一雅の工房を手伝うなどし、生計を立てていたという。この頃の居住地の詳細はわからないものの、沼田は、現在の渋谷区・恵比寿の周辺に住んでいたことから、(註五)おそらく西望もこの周辺に住んでいた可能性がある。この渋谷時代の西望は三カ月間兵役に就くほか、第八回文展に《いざさらば》(現存せず)を出品するも落選となるなど、思うようにいかない日々を過ごすことになる。

その後、雨山の屋敷があった駒込に移り、そこで一念発起して制作した《怒濤》(写真六)が文展九回で二等賞を受賞し(証書七)、翌年の文展十回には《晚鐘》で特選となった(証書八)。このふたつは、現在でも代表作のひとつである。

## 上中里時代

ようやく彫刻家として軌道にのった大正五年に西望は上中里に転居する。上中里のアトリエ（写真七）の様子をみると、天井が高く、外光が取り込めるように大きな窓がついていることがわかる。本写真は、『北村西望 百歳の譜』（新三多摩新聞社 昭和五七年）においては西ケ原のアトリエとして紹介されているが、二〇二三年九月三十日（於…北区 彫刻アトリエ館（仮称））に西望の遺族へこの建物についてインタビューをしたところ、本写真が西ケ原ではなく、上中里のアトリエの写真であることがわかった。また、種井丈氏によると、このアトリエがあった場所は『東京府北豊嶋郡瀧野川町全圖 番地界人』（昭和五年刊行）の地図と照らし合わせることができ、現在の上中里の駅の改札口あたりであったと推測できるといふ。

また、西望は中の様子も写真におさめており、西望がはじめて手がけた大型ミニュメント《橘中佐》（大正八年）（写真八）や、現在も日本のいたるところに設置されている《將軍の孫》（大正七年）の写真も残されており、將軍の孫の写真には「將軍ノ孫 大正七年帝展出品」という書きつけがある。このアトリエで現在も西望の代表作とされる作品が多く制作された（写真九）。また、『来る日の夢』といった現存しない作品の写真（写真一〇）も確認できる。

## 西ヶ原へ

大正一〇年、西望は上中里から西ヶ原へアトリエを移した。その理由は、彫刻家による美術団体・曠原社の創設のためであった。曠原社は、北村西望と建畠大夢らによって大正一〇年に結成された彫刻家による美術団体である。西望は『百歳のかたつむり』（日本経済新聞社 一九八三年）の一節である「曠原社旗揚げ」において、その活動を回想しており、若手の彫刻家のために「研究所」と称した共有アトリエを開設したことなどを語っている。この共同アトリエは、実際に建設され、西望が井の頭自然動物園に移る前まで住み続けた。その後、西望の長男で彫刻家の北村治禱のアトリエとなり、改築がされたが、この建物のシンボルともいえる長屋門は、当初のまま現存している。また、敷地内に設置されている噴水も当初のものと思われる。現在は、治禱の制作したセメント製の彫刻が置かれているが、建設当時は帝国美術院一三回展に出品された《建国の雄姿》（昭和元年）が飾られていたようである（写真一一）。本写真は、これまで紹介されたことのない写真のひとつであるが、この他にも《建国の雄姿》の前で何人かが集い、記念として撮影された写真がいくつか残されているため、西望やその家族にとってこの噴水はとても重要な場所であったことがわかる。

さて、曠原社の理念は「芸術即人格であるとする、人格主義芸術の立場」を謳う団体であった。そして、芸術作品の中に「人間精神の永遠性」を見出し、その「人間精神の永遠性」を「芸術に再現せんかといふことのために、みがくべき技巧がある」と、彫刻を制作に必要な技巧を位置付けた。さらに、曠原社は「自主自治的精神を基調とする、最も人間的な芸術団体」であるとし、社会と芸術の関係を説きながら、「われ等の芸術運動は、人

問への、また、その文化への運動であるのである」と述べている。<sup>〔註六〕</sup>

同時代では、高村光太郎などを筆頭に、多くの芸術家が表現を賛美した時代である。その新しい動向を彫刻界に取り入れた団体が曠原社だったと考えられる。

ただし、一九二三年（大正一二）の関東大震災の影響により、曠原社は、わずか二年で解散に至った。関東大震災の際、西望はアトリエの様子を撮影している（写真一二・一三）。いずれもピントがあつていないスナップショットであるが、〈写真一二〉には、「大正十二年 九月一日」、〈写真一三〉には「大正十二年 大震災」とあり、その際に撮影されたことがうかがえる。大型の彫刻作品が転倒している様が写されていることから、その被害の大きさをうかがい知ることができる。この震災により、多くの彫刻家が生活の維持で精一杯となつてしまつたことを受け、曠原社は解散に至つた。

なお、曠原社は、結成後に社団法人となつており、「法人そのものは、十年ぐらい存続したと思ふ」と西望が述べているように、実際は、清算手続きの完了まで曠原社は消滅していなかつたようである。<sup>〔註七〕</sup>

## 戦争の時代へ

西望は西ヶ原時代において、官展で彫刻作品を発表する一方で、様々なミニチュメント制作に従事していく。曠原社を立ち上げた際に「芸術即人格であるとする、人格主義芸術の立場」を謳っていたが、昭和初期から太平洋戦争終戦までにかけては、かつて三宅坂に設置されていた《寺内正毅元帥騎馬像》（大正一二年、構想は大正九年

から)《写真一四》、《山形有朋公騎馬像》(昭和四年)《写真一五》、《児島源太郎大将騎馬像》(昭和一三年)などの軍人像のほか、《爆弾三勇士》(昭和七年)、《富岡上等兵》(昭和九年)、《雄風―陸軍飛行予備学生》(昭和一九年)など、時局を表した作品を多く制作した。

アルバムには、これらの作品を含めて太平洋戦争の影響を感じさせる作品の写真が複数残されている。これらの写真は、この時代の西望の作品を知る上で重要な役割を有している。というのも、例えば、上記に記したものであるが、それ以外の作品については現存していないからである。これらの資料写真を分析し、国威発揚を促すモニュメントを制作していったこの時代の西望の姿をより深く追っていくことは、北村西望史、または近代彫刻史をかたち作る過程において必要な研究となっていくだろう。この研究に関しては、今後の課題としたい。

その後、西望は戦局が激化した昭和二〇年、三月には埼玉県秩父郡矢那瀬へ疎開することとなる。昭和二八年になると、《平和祈念像》を制作するために井の頭自然動物園へ移り、同地が終の棲家となった。

## まとめ

以上、本稿では北村西望の長崎から東京・西ヶ原で過ごした時代について新出資料を紹介しながら、追っていた。新出資料は、西望の人生の節目を示す資料が多いほか、関東大震災時の写真など、当時の状況を語るものが

多い。

今後は、これらの分析のほか、他の資料の分析と紹介も行っていきたい。

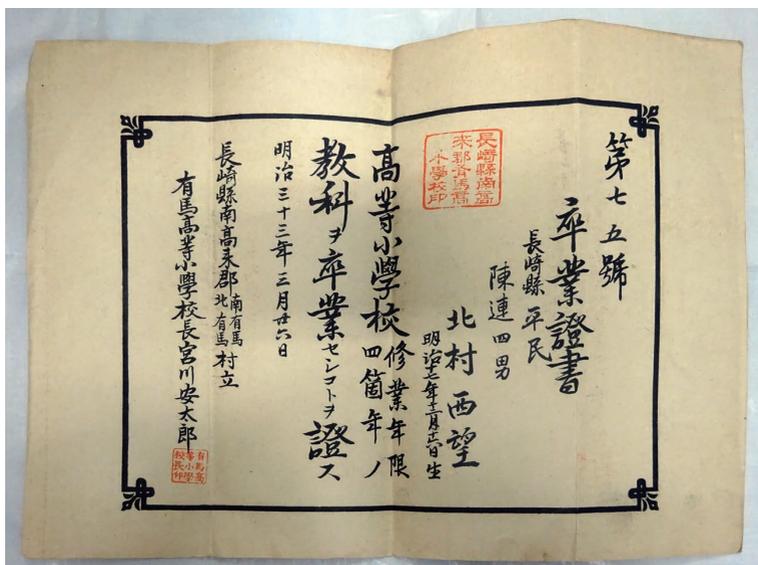
註

- 〈註一〉 『屋外彫刻調査保存研究会会報』第七号 二〇二二年 二五―六〇頁  
〈註二〉 『百歳のかたつむり』（日本経済新聞社 昭和五八年）一七頁  
〈註三〉 前掲二 三五頁  
〈註四〉 金令子「松屋呉服店建築の改装」『建築工芸叢誌』一一号 大正元年 三八頁  
〈註五〉 渋谷区立松濤美術館編『渋谷ユートピア 1900-1945』二〇一一年  
〈註六〉 『曠原』第一卷第一号 一九三三年 一頁  
〈註七〉 前掲二 九二頁

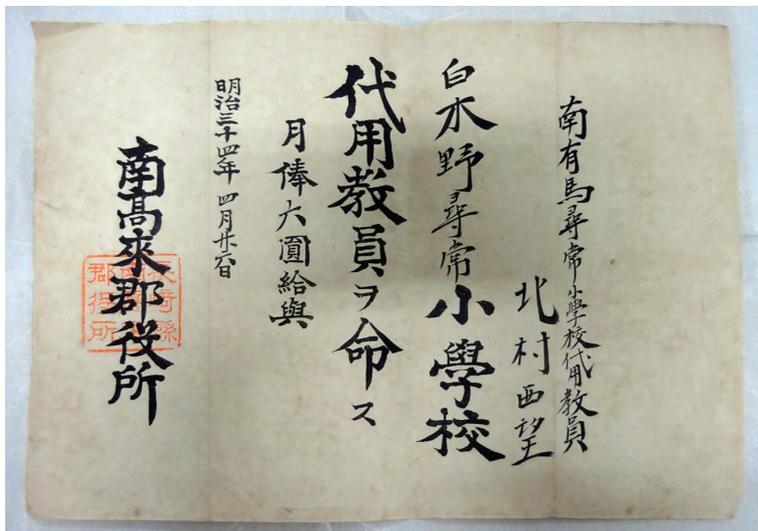
付記…本稿の執筆に関して、北村西望氏のご遺族並びに北区文化振興財団の種井丈氏をはじめとする職員の方々にご協力を賜りましたことをここに記して御礼申しあげます。



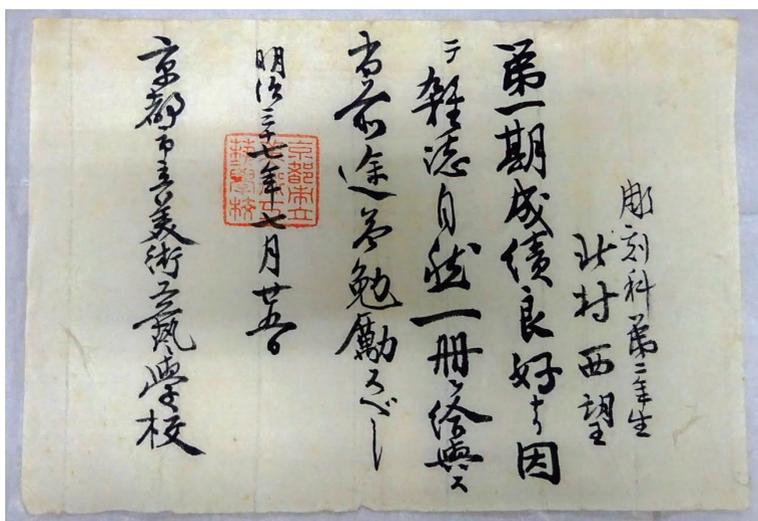
〈証書一〉白木野尋常小学校 卒業証書



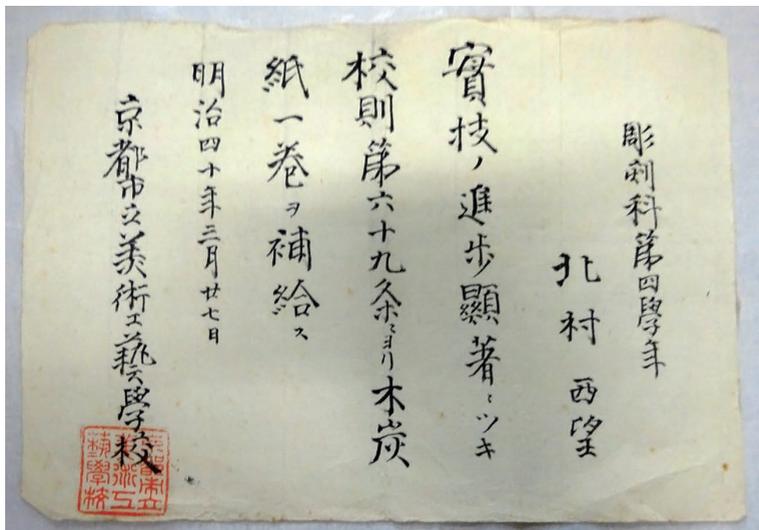
〈証書二〉有馬高等小学校 卒業証書



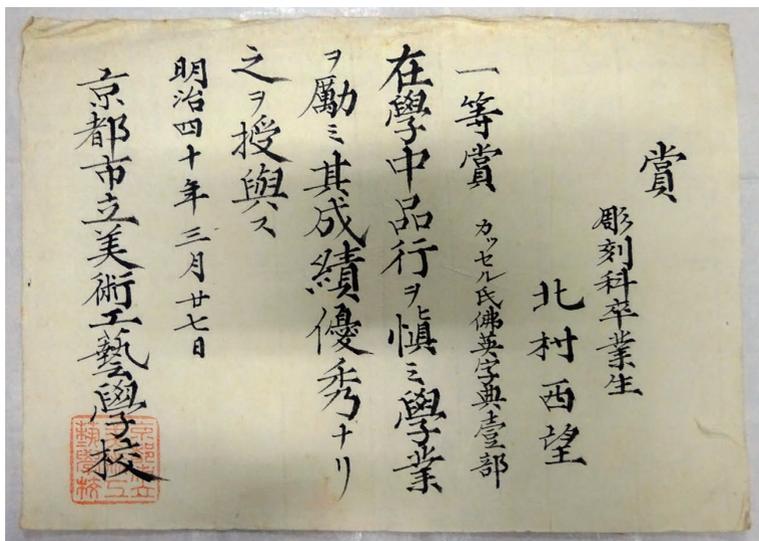
〈証書三〉白木野尋常小學校代用教員 辭令



〈証書四〉京都市立美術工藝學校 賞状



〈証書五〉京都市立美術工芸学校 賞状



〈証書六〉京都市立美術工芸学校 彫刻科卒業生 一等賞 賞状

第五五號  
東京府 北村 西望  
文部省第九回美術展覽會出品  
彫刻 怒濤  
貳等賞

第三部審査委員	山崎朝雲
第三部審査委員	米原雲海
第三部審査委員	新海竹彦
第三部審査委員	白井雨山
第三部主任審査委員	高村光雲
審査委員長	武井守正

右文部省美術審査委員長ノ薦告ヲ  
領シ茲ニ此ノ賞狀ヲ授與ス  
大正四年十一月十四日  
文部大臣四位法學博士高田早苗

〈証書七〉 文部省第九回美術展覽會 二等賞 賞狀

第一號  
東京府 北村 西望  
文部省第十回美術展覽會出品  
彫刻 晚鐘  
特選

第三部審査委員	山崎朝雲
第三部審査委員	米原雲海
第三部審査委員	新海竹彦
第三部審査委員	白井雨山
第三部審査委員	高村光雲
第三部審査委員	小村四郎
第三部主任審査委員	高村光雲
審査委員長	武井守正

右文部省美術審査委員長ノ薦告ヲ  
領シ茲ニ此ノ特選狀ヲ授與ス  
大正五年十一月二十日  
文部大臣從三位勳二等岡田良平

〈証書八〉 文部省第十回美術展覽會 特選 賞狀



〈写真一〉「京都市立美術工芸学校入学当時」(右)、「京都美術一年ノ秋」(中央)、「昭和三十八年ノ四月」(左)



〈写真四〉北村西望《社者》明治四三年第四回文展出品作(現存せず)



〈写真三〉北村西望《雄風》明治四二年第三回文展出品作(現存せず)



〈写真二〉北村西望《墳闘》明治四一年第二回文展出品作(現存せず)



〈写真五〉「東京美術学校第二一回卒業式」



〈写真七〉上中里時代のアトリエ



〈写真六〉北村西望《怒濤》大正四年



〈写真九〉北村西望《将軍の孫》大正七年



〈写真八〉北村西望《橘中佐》大正八年



〈写真一一〉西ヶ原のアトリエの噴水と《建国の雄姿》



〈写真一〇〉北村西望《来る日の夢》（現存せず）



〈写真一三〉 関東大震災時のアトリエの様子



〈写真一四〉 関東大震災時のアトリエの様子



〈写真一五〉 北村西望《山形有朋公騎馬像》昭和四年 山口県・萩市中央公園



〈写真一四〉 北村西望《寺内正毅元帥騎馬像》大正一二年（現存せず）